

鳴門教育大学附属幼稚園 (徳島県徳島市・国営)

今できることをポジティブに捉えて 子どもと一緒に 新しい保育を生み出す

お話しくださった
先生方



鳴門教育大学附属幼稚園 園長
佐々木 晃 先生



部内教頭・年中クラス担任
藤川佳余子 先生



ICT 担当・年長クラス担任
杉山健人 先生

取り組みの
ポイント

休園中

● 園のウェブサイトを通じて家庭に動画や情報を発信し、電話での対話も併用しながら保護者サポートを行う。

再開後

- コロナ感染防止は生きるために必要なスキルと捉え、保育のあり方を探る。
- 子どものアイデアを聞きながら、行事や教育活動を再考する。
- 全体方針の伝達と個別対応を行いながら、保護者の様子を丁寧に見取る。

ICTを活用して園と家庭を結び、子どもの育ちをつなぐ

休園中は園のウェブサイトで 5領域に関連する動画を配信

鳴門教育大学附属幼稚園のある徳島県では、コロナによる感染者は比較的少数で推移していましたが、全国に緊急事態宣言が出された4月半ばから5月末までは臨時休園を余儀なくされました。園では、家にこもりきりの親子が、前向きな気持ちを保てるようなサポートや情報発信について話し合ったと、園長の佐々木晃先生は振り返ります。

「密接な関係性や実感のある対話の中で人は育っていくと信じてきた私たちが、目の前に子どもがいない状況で何ができるのか、大いに悩みました。園生活は突然断ち切られてしまいましたが、生活の文脈

をつなげて、子どもたちの育ちを捉えたい、会えないけれど思いを届けたい、そして、保護者とともに子どもの育ちを支えたいといった考えから、園で動画を作成して配信することにしました」

動画は、保育の5領域を意識して、家庭で楽しめる歌や体操、調理、遊びなどを紹介するコンテンツを約20本製作。園のウェブサイトの保護者限定ページから閲覧できるようにしました(写真1)。

同園では、これまでデジタル機器の活用は進んでおらず、動画を製作する機会もあまりありませんでした。製作は、ICT担当で年長クラス担任の杉山健人先生が他の保育者と協力して園内で撮影し、在宅



(写真1) 動画には、佐々木園長や保育者が登場して、楽しい雰囲気を演出しました。



勤務のときに編集作業を行うなどして進めました。

「入園式直後の休園となったため、入園式でも歌えなかった園歌を配信することから始めました。特に心がけたのは、親子が家庭で楽しい気持ちになれるように、はしばしに笑いを誘う演出を入れたことです。登園再開後、多くの子どもたちが動画で紹介したものをよく知っていたり、遊びにすぐに反応してくれたりして、段差なく園生活に移行できたので、うれしく思いました」(杉山先生)

コロナ禍をきっかけとして ICT 活用の可能性に気づいた

同園では今回、初めて本格的な動画を撮影しましたが、今後の保育に活用できる可能性に気づいたといいます。

「子どもが植えたエダマメとトウモロコシを何日間かにわたって撮影し、コマ送りで再生すると、生長の様子がわかりやすく伝わる動画ができました(写真2)。こうしたデジタル機器の効果的な活用法をもっと研究したいと思いました。一方で、動画の視聴はあくまで興味をもつきっかけとし、本物を見たり感じたりして多様な経験を積むことを、常に念頭に置いておく必要性を感じました」(杉山先生)

保護者がインターネットを使った情報発信に理解を示したことから、登園再開後もサイト上にお便り



(写真2) 子どもたちが生長を気にしていた植物の様子を、コマ送りで見られるようにしました。



<https://www.youtube.com/watch?v=HLRxcpkdXRU>

などを掲載して、ペーパーレス化を図ることにしました。省資源化や保育者の省力化に加え、紙を介したコロナの感染拡大を防止するねらいもあります。事前に全家庭にウェブサイトの閲覧が可能かを確認し、一部の家庭には従来通り、紙の印刷物を配布するといった配慮もしています。

休園中には、気になる家庭に対して、保育者が積極的に電話をして悩みや不安を聞くサポートも行いました。

「一方向の伝達だけではなく、相手の声をじかに聞いてやり取りするのは、保育や教育の基本です。保育者からの電話にホッとした様子で悩みを話してくれた保護者もいました」(佐々木園長)

休園中、保育者は2チームに分かれて、交互に園での勤務と在宅勤務に従事しました。園勤務の保育者は動植物の世話や修繕、開園準備などを行い、在宅勤務の保育者は自宅に対応できる作業をしたり、普段はなかなか時間が取れない自己研修を行ったりしました。

休園中は親子がまっすぐに 向き合えるよさもあった

登園再開後に休園期間を振り返ると、子どもや保護者にとってはプラスとマイナスの両面があったと、佐々木園長は話します。

「保護者が子どもと向き合う時間ができたことは、双方にとって大きなプラスでしょう。日頃は『子どもはどうすると喜ぶのか』『どのように過ごすと有意義な時間になるのか』など、子どもの1日の過ごし方について真剣に考える余裕はなかなかありませんが、休園中は会話の時間が増え、一緒に工作などにチャレンジした保護者も多かったようです」

また、子どもたちは、休園中、家事や在宅勤務をする保護者の姿を見ることができました。登園していると知ることのない保護者の姿を発見できたことも、子どもにとってプラスの影響があったと、佐々木園長は考えています。

一方で、普段とは異なる生活に対するストレスや不安から、保護者が子どもを叱る頻度が増え、自己嫌悪を抱いてしまったといったマイナスの影響を感じる報告も受けたといいます。さらに、実体験に基づく遊びや活動の機会が失われ、テレビやゲームなどに触れる時間が増えたことへの影響を心配する保護者の声もありました。

保育再開後の子どもの姿から「レジリエンス」の育ちが見えた

ネガティブな影響は見られず 子どもの強さを再確認した

しばらくの間、自宅で外出もままならない生活を送った子どもたちには、どのような影響が表れるのか……。佐々木園長は心配しながら登園再開の日を迎えましたが、普段と大きく変わらない姿に胸をなで下ろしたといいます。

「久しぶりに見た子どもたちの表情は、保育者や友だちと再会できた喜びにあふれていました。保育の再開後も注意深く様子を観察しましたが、子どもたちの内面にはネガティブな影響はあまり見られず、子どもの強さを改めて感じました」（佐々木園長）

それでも、子どもを取り巻く社会環境は大きく変わり、保育のあり方にも変化が求められています。再開後の保育の方針は次のように考えています。

「現代社会には多様なできごとが起こるものと受け止め、そのときどきの状況でよりよい生き方ができるように子どもを支えることが、私たちの役割だと考えています。コロナ禍で今までの価値観は通用しなくなりましたが、発想を転換し、マスク着用やキープディスタンスなどは生きるために必要なスキルとして身につくようにしながら、その中で子どもの育ちを支える保育のあり方を探っていきたいと考えています」（佐々木園長）

同園では、取材時の7月下旬には、主に次のような感染対策を行いました。

- ・子どもの手指をこまめに消毒する
- ・通常、子どもはマスクを着用しないが、密集時には着用する
- ・保育者は常時マスクを着用する
- ・遊具や教材はこまめに消毒する
- ・出入口は1か所にして消毒を徹底する
- ・ウイルスを持ち込まないために、事前連絡のない人は園内に入れないようにする

子どもからアイデアを集めて イベントの内容を見直す

できるだけ3密の状態を避けるため、行事も再考しました。例えば、例年7月には年長児を中心として、開会式の花火のあとに子どもたちが阿波踊りを踊ったり、お化け屋敷や夜店を出店したりして、お

泊まり保育をする「夕べの集い」というイベントを行っていますが、現状では実施が難しいと判断しました。しかし、子どもから残念がる声が多く聞かれ、保育者にも思い出をつくってほしいという思いがあり、中止ではなく別の形での実施を模索しました。

「なんとか、すべての子どもが納得した形で実施したいと考えました。そこで、年長の子どもたちに前年度の写真を見せて『このように人が集まる状態は避けられないのだけれど、どうしたらいいと思う?』と投げかけて、アイデアを募りました」（杉山先生）

すると、「花火はできないから、画用紙に花火の絵を描こう」「お化け屋敷は離れた場所からボールを投げお化けを倒せばいい」など、保育者が驚かされるほど豊かな発想が出てきました。お泊まり保育は中止にしましたが、そうした子どもたちのアイデアを参考にしながら、阿波踊りはクラス別に部屋で踊ってオンラインでつなぐといった工夫も取り入れて、イベントを実施しました（写真3）。部内教頭の藤川佳余子先生は次のように話します。

「感染リスクの制約のため不自由さや大変さはありますが、半面、子どもとともに新しい保育をつくり出していくクリエイティブな楽しみも感じます。今回、子ども自身が『どうしたら実現できるか』を考えて準備した過程は成長につながったと思いますし、より特別な思い出にもなったと考えています」



（写真3）園行事は、3密を避けられないから中止ではなく、どのような形にすれば実施できるかを、子どもと一緒に考えて見直しています。

「コロナ」を取り入れた遊びに 保育者も元気づけられた

日常の保育では、極端に3密になる状況は避けていますが、常に距離を取ったままでは遊びや活動は成立しません。そのため、保育の内容は従来から大きく変更せず、室内での絵本の読み聞かせ時など子どもが密集しやすい場面ではマスク着用を促したり、使用後の道具はこまめに消毒したりといった感染対

策をして、乗り切っています（写真4）。

子どもが遊びの中に「コロナ」を取り入れる姿も多く見られます。工作でメガホンを作って周りの子どもたちに手洗いを呼びかけたり、お店ごっこで飛沫防止のフィルムを設置したり、床に等間隔にテープを貼ってキープディスタンスを表してみたり……。保育者は、そうした発想と一緒に楽しんで、遊びが展開するようにサポートしています。

「子どもには、嫌なことや不安なことがあると、それを遊びの中で再現して乗り越えようとするタフさがあります。今回のコロナ禍に対しても、自分たちなりの方法で立ち向かおうとしているのでしょう。これはまさしくレジリエンス（跳ね返す力）だと感じており、その姿に私たちのほうが元気づけられています」（佐々木園長）



（写真4）状況に応じてマスクを着用してもらいながら、できる限り、通常通りの保育を維持して子どもの育ちを促せるようにしています。

全員でよりよい方策を考える過程で 園内のチーム意識が強固に

休園期間が長引いたため、保育再開後、子どもが園やクラスになじんでいるかと心配する保護者も多く見られます。感染防止の観点から保護者会や保育参観などが実施しづらいことも、特に新入園児の保護者との信頼関係の構築を難しくしています。

そこで、6月に保育の目的や意義を伝え、ともに子どもを育てる関係性を築くことを目的として、「ペアレンツセミナー」という約30分間の動画を年齢ごとに作成し、配信しました。また、6月の後半には短時間ながらも保育を見てもらう機会をつくり、担任が1対1の保護者面談を行い、意思疎通を図りました。

「私が担任を務める年中児クラスもそうでしたが、新入園児クラスの保護者の方々が、子どもたちの様子や私たち保育者の人となりをご自分の目を見て、安心された様子が伝わりました。また、全体的な保育の方向性の確認とともに個別の対話もできて、理解を深めていただいたと思います」（藤川先生）

さらに、同園ではきめ細やかに保護者の様子を見取り、「子どもは家でどのような様子か」「困ったり悩んだりしていることはないか」などと、以前にも増して丁寧に関わりかけたり、必要に応じて電話をかけたりするフォローを心がけています。

コロナ禍への対応に関して、「こうすればよい」という1つの正解はだれも持っていません。そのため、佐々木園長は保育者一人ひとりの強みを生かしながら、それぞれの考えを引き出して、よりよい方策をつくり上げる姿勢を大切にしています。その過程を通して、園内のチーム意識が以前よりも強固になっているといいます。

「マニュアル通りではなく、一人ひとりが自分の問題と捉えて主体的に考えようとしていることが、常に責任感のある姿勢につながっているのでしょう。ただし、今は頑張りすぎてしまいやすい状況です。『どこにもっとも心を込めるか』を意識して仕事を精選し、外部に任せられる業務はどんどん外注するなどして『働き方改革』にも取り組み、先生方の心身の健康も支えていきたいです」（佐々木園長）

園長先生から全国の保育者へのメッセージ

地域ごとに感染状況は異なりますが、コロナ禍に必死に立ち向かって子どもを守ろうとしている同志たちが全国にいると思うと、とても心強く、私たちも頑張らなくてという気持ちになります。どれほどの苦難に見舞われても、子どもたちは遊び続けます。それはまさに

希望の光です。それぞれの園が孤立せずにつながり、この事態を乗り越えることで、今までよりもずっとすばらしい保育が実現できると、私は信じています。保育所・幼稚園・認定こども園が、本当の意味で三位一体となって前進していきましょう。

鳴門教育大学附属
幼稚園

1893（明治26）年開園。子どもの遊びを誘発する環境を「遊誘財（ゆうゆうざい）」と名づけ、その研究と実践に力を注ぎ、豊かな遊びに基づく保育を展開する。

- ◎ 園長：佐々木晃先生
- ◎ 所在地：徳島県徳島市南前川町2丁目11番地の1
- ◎ 園児数：130名（3～5歳）

まちなこども園 代々木公園 (東京都渋谷区・私営)

想定外の状況下も対話を重ねて よりよい保育を追求し ICTの活用で実現をめざす

お話しくださった
先生方



まちなこども園
代々木公園 園長
山岸日登美 先生



コミュニティ
コーディネーター
しゅつた
習田和正 さん

取り組みの ポイント

- 園の理念や目標に沿って、今あるもの・できることを検討して状況の変化に対応する。
- 保育者一人ひとりが「できること」を考え、ICTツールを活用して実現を図る。
- 保護者との情報共有やコミュニケーションを徹底し、ともに状況を乗り越える関係をつくる。

状況が変わっても、開園以来の理念や目標を大切に

「今日は何をしたい？」と問いかけ

その日の保育を形づくる

東京都内に5園を運営する、まちな保育園・こども園。「まちぐるみ」で子どもを育てるとともに、子どもたちと「まちづくり」に取り組むという考え方をもち、子どもを真ん中にして園と保護者、地域コミュニティがつながる保育を展開しています。そうした全園共通の理念とともに、園ごとに地域性や環境、施設、そこに集う人々の多様性に合わせた関係性づくりを大切にしており、それぞれ特色のある保育を実践しています。

「まちなこども園 代々木公園」は、都心では屈指の広さを誇る代々木公園という恵まれた環境の中にあります。同園では設立時に職員全員で話し合い、「変化し続けること」「子どもは価値の創造者であること」という2つを、大切な理念として確認しました。園長の山岸日登美先生は次のように説明します。

「代々木公園は、時代の移り変わりとともに役割を変えながら多様な文化を発信してきました。私たちの園も変化を恐れず、毎年、子どもの実態に合わせて保育を柔軟につくり変えることを大切にしています。そして、保育を通して子どもが創り出す価値を発見し、その育ちを支え、世の中に届けていきたいと考えています」

同園の保育の特色がよく表れているのが、毎朝、子どもたちに「今日は何をしたい？」と問いかけ、一人ひとりのやりたいことを出発点として、その日の保育を形づくっていくことです。子どもたちは、「昨日やった染め物を、今日は公園で拾った葉っぱを使ってやりたい」「どんぐりがたくさん落ちていたから集めて何かを作りたい」などと自由に発想します。保育者はそうした想いをくみ取り、遊びや活動に発展させる環境を柔軟につくり上げていきます。

保育者一人ひとりの想いを ICT ツールの活用で実現

開園以来の理念や目標を大切にしながら対話を重ねる保育は、コロナの感染拡大に伴う休園中も、形を変えて継続されました。渋谷区の要請に従い、4月上旬から一斉休園の措置が決まった際、保育者に対して「子どもや保護者に向けて、園として何ができるか」などのアイデアを求めました。子どもの興味・関心に寄り添いながら保護者や地域と連携し、保育環境を整えていく役割の専任職員「コミュニティコーディネーター」の習田和正さんはこう話します。

「だれもが経験したことのない今回の事態に柔軟に対応できたのは、園長のリーダーシップやビジョンのもと『何ができるか』を職員一人ひとりと対話して、アイデアを出し合ったことが本当に大きかったと思います。『こんなことができるのではないか』といった保育者の考えを実現するための具体的なしくみを、ICT ツールなどを活用しながら検討していきました」

その中で出たのは、「保育の継続」「家庭の困り感を拾いたい」「地域のために何ができるのか」という主

に3つでした。保育の継続については、ウェブ会議システムを活用して、毎日の朝の会や週に1、2回のオンライン保育を実施しました。さらに、家に閉じこもる状況が親子に及ぼす影響を心配する声も多く、オンラインによる保護者面談なども行いました。

これまで同園では、積極的に保育にICTを取り入れてきたため、オンラインツールの導入も比較的スムーズでした。保護者への事務連絡や情報共有にはスマートフォンの連絡アプリを活用しているほか、子どもの育ちを記録するドキュメンテーションの製作もパソコンで行っています。また、各クラスにはタブレット端末があり、子どもたちが調べものをするなど、自由に使いこなす姿も見られます。ウェブ会議システムに関しては、本社や他園との打ち合わせに管理職の職員が使うだけだったため、休園に際しては、連絡アプリを通して保護者に操作方法を説明するなどして周知しました。そうしたことはすべて、保護者の理解や協力がなければできないため、日頃からよい関係性をつくることの大切さを改めて感じたといいます。

休園中はオンラインでつながりを保ち、保育を継続

「双方向性」に配慮して オンライン保育を実施

毎朝、クラスごとに実施した朝の会では、保育者と子どもや、子ども同士が顔を合わせてつながりを保つことを一番の目的に据えました。家庭の都合も考慮し、基本的に自由参加としましたが、多くの親子が毎朝楽しみに参加する姿が見られました。保育者は「元気?」「今日は何をするの?」などと質問を投げかけ、健康確認や会話の中で子どもたちが前向きな気持ちになるようにリードしました。

そして、週に1、2回、通常は午前中にオンライン保育「おうちでこども園」を実施しました。特に重視したのは「双方向性」です。

「保育者が『これをしましょう』と一方的に決めるのではなく、普段の保育と同様、朝の会の会話などから子どもの興味や関心を注意深くキャッチし、そこから活動に発展させていきました。ICT ツールは使い方によっては一方通行にもなるため、その点には常に配慮しました」(山岸園長)

オンラインによる「おうちでこども園」は人数が多すぎると進行が難しくなることもわかり、事前にテーマを伝えて希望を募り、内容に応じてグループ分けするなどの工夫も行いました。

4、5歳児を対象に実施した「コラージュをつく



(写真)「おうちでこども園」の「コラージュをつくろう」。

ろう」では、事前にコラージュの作り方の動画を配信して興味をもった子どもに作品を作ってもらいました (P.19 写真)。そして、「おうちでこども園」の時間に順番に作品を紹介し合い、保育者は質問を投げかけて子どもたちの自由な発想と表現を促しました。ストーリーがよく練られた作品が多く、ある子どもは代々木公園や海、花畑などの写真を切り取って貼りつけていました。保育者は、子どもの豊かなイメージーションを感じ取ったといいます。

また、休園前から染め物について子ども同士で対話をしていたことを受け、休園中に家庭で自主的に作品を作った子どもがいました。そこで、「おうちでこども園」の時間に発表してもらい、ほかの子どもには家の中で染め物ができそうなものを探して保護者と試してみるのはどうだろうという話をしました。次の時間、子どもたちは野菜や果物などで染めた作品を持ち寄り、保育者はどのような物を使うと染めやすいかなど、子ども同士の対話を促しながら、活動が発展するようにフォローしました。この染め物への興味・試行錯誤は、登園再開後も続いています。

並行して、保育者が作成したオリジナル動画の配信にも取り組みました。「おうちでこども園」に参加できなかった子どもが、あとから活動の様子が見られるコンテンツを準備したり、家庭でできる遊びや歌、体操を紹介したりなど、2か月間で約120本もの動画を配信したといいます。なかには、「これをやりたいね」という子どもや保育者からの発信をきっかけとしたものも数多くありました。賛同する人によって始まったプロジェクトが、動画だけでなく「おうちでこども園」にもつながり、普段の保育のように、クラスや学年を超えた活動へと発展していきました。そうしたコンテンツに子どもと一緒に参加した保護者からは、「園とのつながりが感じられて安心する」といった感想も多く寄せられました。

ウェブ会議システムで 各家庭の保護者面談を実施

オンラインツールを活用した保護者へのサポートも行いました。担任がウェブ会議システムを用いて保護者面談を実施。子どもや家庭の様子をヒアリングしたほか、保護者の悩みや困っていることを聞き、園としてできることを一つひとつ考えていきました。

休園中には、保護者が自由にウェブ会議システム



上のルームを訪問して、保育者や看護師などと話ができる「Welcome room」も何回か実施しました。事前申し込みは不要で、開設中はだれでも気兼ねなく利用できるように配慮しました。

さらに家庭と家庭をつなぐツールとして機能したのが、写真共有サービスです。従来は行事やクラスの写真を保護者と共有するために用いていましたが、休園中は各家庭で子どもが遊ぶ姿や作品などの写真を投稿するように呼びかけました。

「家庭が孤立しやすい状況で、『〇〇ちゃんが元気でよかった』『ほかの家ではこんな遊びをして過ごしているんだな』などと、いろいろな家庭の様子を知ることによって不安を和らげるとともに、家で楽しく過ごすヒントを見つけてほしいと考えました」(山岸園長)

毎朝のミーティングや協働作業で 保育者のメンタル面をサポート

休園中、保育者の多くは在宅で業務を進めました。毎朝、日課としたのが、各学年などのグループごとのオンラインミーティングです。

「その日の作業内容を確認するとともに、もう1つのねらいだったのが、保育者同士が励まし合い、前向きな気持ちを保つことでした。特に地方出身でひとり暮らしの先生は孤独になりやすいと思ったからです。同じ理由で、オンライン保育の準備や動画製作などの作業は、1人ではなくチームで協働しながら

図 在宅勤務時の個人研究の内容 (一部抜粋)

- 代々木公園を活かした五感を育む保育について
- 持続可能な社会と遊び環境の設定
- よりよいチームと人間関係を築くための関係力について
- 乳児期の人見知り
- 発達心理学の基礎概念および教育の思想と歴史の変遷
- コロナ禍にある世界各国の保育の取り組みについて
- 保育実践における観察や記録方法に関する理論の整理

進める態勢を整えました」(山岸園長)

また、子どもや保護者に向けた発信と並行して、保育者は時間をつくって自己研鑽にも努めました。現在の課題意識などをもとに全員がさまざまなテーマの個人研究を行い、発表の機会も設けました(四)。

さらに、「まちの広場」という仕事以外のことを話す場も、有志によって開設されました。オンラインの「まちの広場」に集った保育者は、ときに昼食を食べながらさまざまな話をして、つながりを感じたり、気晴らしができたという話をしています。

コミュニティの力を強化して 不確かな状況を乗り越える

登園再開後は、手洗いや消毒などの独自の感染対策ガイドラインを、対話を重ねながら作り上げる一方で、保育の中では一定のリスクは避けられないと考え、そのことを保護者に繰り返し伝えていきます。

「子どもの育ちを保障するために、可能な限り保育内容は変えていません。しかし、消毒などに時間を取られて子どもと接する時間が減ったり、保育者がマスクを着用することで特に0歳児に表情や口元からのメッセージが伝わらず、今後の発達に影響が出ないかと不安に思うなど、さまざまな悩みがあります。そうした事情を保護者にも伝えて共有し、子どもの育ちと感染対策とのバランスをどこでとるかを一緒に考えていきたいと思っています」(山岸園長)

コロナ禍をきっかけとしてICTツールの活用が進んだ一面があり、今後の保育や園運営にも生かしたいと考えています。

「ウェブ会議システムによるコミュニケーションは、大人よりも子どものほうがすぐに慣れました。

そうしたツールを使い、他園の子どもや園外の人たちとつながる活動なども検討したいと思っています」(山岸園長)

登園再開後も、さまざまな事情により、登園がかなわない一部の子どもがいます。今後、そうした家庭に保育の様子をリアルタイムで配信し、オンライン保育を受けられるしくみの構築も検討しています。さらに、登園再開後には、オンラインによる「新型コロナウイルスへの対応に関する懇談会」を開催。園の状況を伝えるとともに、保育者の悩みや思いも率直に伝え、保護者と前向きな対話をして、より強固な関係性を築きました。オンライン保護者会は、感染対策だけでなく保護者の状況や考え方を尊重しながら、これからも継続する予定です。

同園ではもともと保護者や地域とともに子どもを育てることに力を入れてきましたが、コロナ禍を機に、その大切さに改めて気づいたといいます。地域に目を向けると、普段、子どもと交流のある商店街などの活気が失われている状況があります。

「最近、子どもたちと『幸せ』について対話をする時間を多く設けており、その中でさまざまな言葉や作品が生み出されています。コロナ禍で失われたものはたくさんありますが、私たちにはどんなに小さなことから幸せを感じ取る力があると信じています。今後、そうした成果を保護者や地域のみなさんにお届けすることで、微力でも『まち』の力を取り戻すきっかけになればと考えています」(山岸園長)

現在も不透明な情勢が続きますが、今後も開園以来の理念や目標を見失わず、園・保護者・地域のコミュニティが子どもを中心に一体となって力を発揮し、子どもの育ちを支えることをめざしていきます。

園長先生から全国の保育者へのメッセージ

私たち保育者は常に笑顔でいるべきという思いが強く、外部に弱さを漏らさない傾向があるように思います。とても大切な心がけですが、多くを抱え込んで無理をしすぎるという側面もあります。コロナの影響が長引く中、頑張る保育者を支える上でも、保護者や地域の方々

つらいことや困っていることを本音で語ることで、本当の意味でのコミュニケーションができるかもしれないと思うようになりました。コミュニティをもっと頼り、保育者自身が穏やかでいられることで、子どもにも好影響がもたらされるのではないのでしょうか。

まちのこども園
代々木公園

JR原宿駅から徒歩4分、代々木公園の中に立地。
園舎は日本家屋をイメージして造られ、中心には子ども同士がつながり合うアトリエがある。

◎ 園長：山岸日登美先生
◎ 所在地：東京都渋谷区代々木神園町2-1
◎ 園児数：128人(0~5歳)